

第二十六回香川菊池寛賞受賞作品

あかつき荘

たなかちさと
田中千里

1

都心から快速電車に乗って三十分のところにある武蔵野市吉祥寺は、かつて屋敷町と呼ばれていた。

駅前から五日市街道に突き当る百メートル足らずの商店街を抜けた後は、高い塀を巡らせた邸宅がほどよい隔たりをもって建ち並び、庭内にうっそうと茂る大木がそれぞれの家の長い歴史を物語っていた。

邸宅が途絶える隣町との境目には野鳥の集

まる雑木林があった。それは南北に弧を描くように駅の反対側の井ノ頭公園まで伸びていて、吉祥寺の町はその雑木林にすっぽりと抱かれた形になっていた。

季節の移ろいによって色合いを変える豊かな緑と、そこに集まってくる野鳥の姿。

吉祥寺の人々は、木々のそよ音と野鳥のさえずりの中で、穏やかにゆつくりと年を重ねてきたのである。

しかし、二十年前に突然人集めと銘打つての吉祥寺開発計画が実行に移された。それ以来、町民の嘆きとため息をよそに吉祥寺は目まぐるしい変貌を遂げてきた。

1

まず雑木林を切り開いて大規模な公園住宅が建設された。それは地面を這う勢いで棟を増やし、五階建てが十棟並んだときには吉祥寺の人口は一挙に倍増した。

続いて私電の吉祥寺駅がステーションビルに生まれ変わり、両隣に二つの大手デパートが次々に開店した。

駅前のロータリーを中心に三方に延びたアーケードの下には、洒落たインテリアの喫茶店やレストラン、流行を先取りするブティックが建ち並び、その周辺には二十四時間営業のマーケットやゲームセンターが軒を連ねている。

雑木林の一角が辛うじて残っているものの、も

う木々のそよ音も野鳥のさえずりも聞こえない。

今の吉祥寺には昼夜の区別さえなくなった。

派手な音楽とイルミネーションが交差する中を、我が物顔で行き交う若者の群れ。一日二十四時間、ベルトコンベヤーに乗った品物のように絶え間なく流れている。

もはや吉祥寺は、その若者たちによって占領されたのも同然だった。

その吉祥寺のほぼ中央、東町一丁目にあかつき荘という古いアパートがある。

駅前の道を線路に沿って東に百メートル行

2

き、南に曲がって三軒目、雑居ビルに挟まれてひつそりと建っている。

戦後まもなく建てられたという建物は木造モルタルの二階屋で、黒光りする板塀と二枚の大きな引き戸が昔の木賃宿といった風情を漂わせていた。

部屋は一、二階合わせて十室。六畳一間に三畳の台所がついているだけで、風呂はなくトイレも共同である。今時分珍しいほどの悪条件であるが、不思議に入居者が途絶えることはなかった。それは、吉祥寺が若者の町として生まれ変わる前も後も変わることなく続いている。大家は板垣源造という老人で、この辺りに

両手で数えられないほどの不動産を持つ資産家である。

源造は若い頃からすべての不動産を自分自身で管理し運営してきた。しかし、七十歳近くになった今ではさすがに足腰が弱まり、思うように出歩くことができなくなった。そこで、源造は現役を引退するための準備として大がかりな不動産の整理に取りかかることにした。

町内に持っていた古い建物をすべて壊して立体駐車場を造り、空き地のままになっていたいくつかの土地には一、二階は貸し店舗、三階以上は賃貸マンションとするビルを建設する計画を立てた。

どちらも建設会社との契約が終わり、まもなく工事が始まることになっている。

次の仕事はそれぞれの不動産の管理を任せる人物を決めることだった。源造の二人の息子は商社マンやエンジニアとして海外で活躍している。いずれは息子たちに譲るつもりではあるが、彼等のためにも確かな管理人を選んでおく必要があった。

今までの人脈を利用して候補者を募り、何度も面接を重ねて慎重に決めていった。源造の計画は着々と進み、後一步で完了というところまできている。そして、最後に残ったのがあかつき荘だった。

今までも何度かあかつき荘の処分について話が持ち込まれていた。吉祥寺の一等地にあるこの土地に目を付けた業者が、相場の倍以上の金額を掲げて源造の家に日参したこともある。しかし、源造はどの話にも首を縦に振らなかった。土地を転がすことで資産を増やしてきた源造にしては不可解な行動だった。

「貪欲な男のことだ、きっと何か理由があるに違いない」
「いや、単に今以上の値上がりを待っているだけのことだよ」
世間の人々は首をひねり、いろいろと噂しあつたものである。

そして、今回の源造の計画の中にもあかつき荘の取り壊しが入っていないことが、再び世間を騒がせている。

家賃の値上げも望めない古いアパートで、今さら値打ちが出る建物だとも思えない。源造がどうしてあかつき荘を残しておくのか、その理由を知りたくて、人々は源造の次の動きを見守っていた。

そのことを知っているのかいなのか、源造は今でも一日に一度、決まった時間にあかつき荘の前に立つ。そして、足腰を労わりながら建物の周りをゆつくり歩き、立ち止まっては愛しそうに建物を見上げていく。

源造の心の中に、この建物だけは他人でなく

あたらしい人生に立ち向かおうとしている栄子に託そうとしていた。

2

村木栄子は、期待と不安の入り混じった気持ちを抱いて吉祥寺の雑踏の中を歩いていた。

結婚後に二度ほど夫の運転する車で源造の家を訪れたことがあるが、町中を歩くのもあかつき荘を見るのも今日が初めてである。

あかつき荘の話を書いたのは三日前だった。突然の話だったが、栄子の心は動いた。

三ヶ月前に夫の守を交通事故で失った。それ以来無気力な毎日が続いている。守と五年間

身内の誰かに管理を任せたいという強い思い入れがあった。そのために、最後まで人選を延ばしたのだった。

何日か思案した末に、源造の頭に浮かんだのが三ヶ月前に夫を亡くしたばかりの姪の村木栄子である。考えるほどに栄子にぴったりの仕事だと思えてくる。

源造はさつそくその夜、栄子に電話をかけた。時代の流れにすっかり変わってしまった吉祥寺。その中であつて、今も昔の面影を残しているのは横丁の小さな天神様とあかつき荘だけと言われている。

源造はこの古い建物の将来を、子供を抱えて

の結婚生活を送ったマンションは、息子の直哉と二人だけで暮すには広すぎる。そして、帰ってこない夫を待ち続ける一日は限りなく長い。食事の用意も掃除もする気にならず、ただぼんやりと直哉の姿を目で追っているだけの日々だった。

夜は医者にもらった精神安定剤の力を借りなければとても眠れない。それでも、何度も守の夢を見ては、自分の泣き声で目を覚ました。直哉と二人だけでこれからどうやって生きていけばいいのか。胸が押し潰されそうな不安を感じて栄子は声を出して泣いた。泣き疲れて再び眠って、目を

覚ませばまた長い一日が待っている。直哉の前では意識して明るく振る舞っていた

が、母親の不安定な心理状態が子供に伝わらないはずはない。夜中に栄子が泣いていると必ず直哉も目を覚まして愚図り始める。それは夜泣きの悪癖となつて毎夜繰り返されるようになり、食欲不振、情緒不安定といった症状にまで及んでいった。

栄子がこのままではいけないと思ひ始めたのは、直哉が原因不明の熱を出したときだった。高熱のために朦朧としてゐる意識の中でも栄子の手を握つて離そうとしない。ベッドに横たわる直哉の顔は頬が瘦け、目の下に青黒い隈が広がっていた。病気を跳ね返す力もなく、日毎に衰弱していく直哉を見て栄子は身勝手な自分を責め

た。母親の立場を忘れて悲しみに浸つていた自分が恥ずかしかつた。

栄子の不眠不休の看病と、一週間ぶつ続ける点滴でどうにか回復のメドが立ったとき、栄子は新しく出直そうと決心した。

そのために、守との思ひ出があり過ぎるマンションから離れなくてはならない。兄夫婦が同居している実家に帰ることもできず、どこかにいい引越し先はないかと探し始めたとき、源造があかつき荘の話をもってきたのだつた。

あかつき荘の大家の板垣源造は、栄子の母方の伯父である。女の子供に恵まれなかつた源造は、子供の頃から栄子を可愛がつてくれた。守の

葬儀のときも誰より栄子をいたわり励ましてくれた。その源造が、栄子と直哉の将来を考えて持ち出した話には違ひなかつた。

栄子は丸二日考へた。源造の思ひやりが嬉しかったし、環境を変えるためにはうつつけの話だと思ふ。しかし、まだ若い自分に管理人の仕事が務まるかどうか不安だつた。迷つたあげくあかつき荘を見てから決めることにして、今日吉祥寺に出かけてきたのだつた。

(以上10月28日放送分)